

歴史資料に見る宮崎の
災害・防災
 No. 9

凍霜害・積雪害
 —温暖の地 みやざき においても—

本県は、緑と太陽に恵まれた南国の地と言われます。太平洋側を暖流（黒潮）が流れているために温暖な気候で雨の多い土地柄となっています。この温暖で多雨な気候を活かした農業が盛んで、様々な農産物が生産されています。また、農業だけではなく林業や水産業なども盛んに行われています。このように温暖な地宮崎においても、時に冬季から春季にかけて凍霜や積雪による被害が発生しています。今回は、本県で発生し、特に被害の大きかった昭和29年の凍霜害及び昭和38年の積雪害について紹介していきます。

1例目は、昭和29年3月29日から31日に発生した凍霜害の事例です。3月25日、上海付近にあった1,004 mbの低気圧が、26日には1,000 mbに発達しながら九州南海上に東進し紀伊半島方面に去ると、寒冷前線が南下、バイカル湖付近に中心をもった優勢な大陸高気圧が南東に張り出して冬型の気圧配置となりました。その後27日いっぱい北西の季節風が吹き続き、28日には次第に弱まったものの大陸高気圧の一部は移動性となって、29日から30日には西日本一帯を覆い、典型的な晩霜型の気圧配置となりました。このため、宮崎地方は29日から31日にかけて朝晩は急に冷え込み、県南の沿岸地方でも氷点下となり、県下一帯にわたって霜、霜柱、結氷、雪などの現象が観測されています。五ヶ瀬町^{さんがしよ}三ヶ所では、-6℃を記録しました【資料1】。

早春の異常気象による本県の作物災害は、いわゆる晩霜害と呼ばれるもので、作物の新芽や茎葉の縮みや白化などのように肉眼で容易に鑑別できます。

ところがこの29年3月の凍霜害は、何十年に一回といわれるくらい特異なものでした。外見的よりむしろ内面的、生理的障害の様相を示し、それが被害をより深刻なものにしていました。例えば、麦の幼穂の凍死、茎内部の凍結による組織の損傷等は、日を追って明確化していくものなので、低温直後の外見からは真の被害の程度は判定困難な状態でした。また、菜種の場合では、極端な低温のために子実^{しじつ}は凍死しているに

表 3月29～31日の県下各地における最低気温

地名	29日	30日	31日
崎	-0.1	-0.7	0.5
城	-0.3	-0.5	3.0
津	0.5	-1.5	0.6
野	-2.2	-0.2	1.8
南	-1.6	-3.2	0.8
津	0.3	-0.2	3.0
々内	-3.0	-5.0	-4.5
名	-2.5	-4.0	-4.1
城	-2.6	-4.6	-4.0
岳	-1.2	-1.5	-3.5
林	0.2	-4.6	-5.5
木	-0.1	-0.3	-6.1
幸	-1.1	-3.8	-4.0
重	-0.8	-2.0	-2.5
八	-1.0	-4.0	-4.8
所	-0.5	-0.6	-2.2
門	-7.0	-0.9	-3.2
代	-3.2	-2.6	-4.8
良	-4.5	-4.0	-6.0
穂	0.4	-1.0	0.5
所	1.4	2.6	1.8
々			
呂			

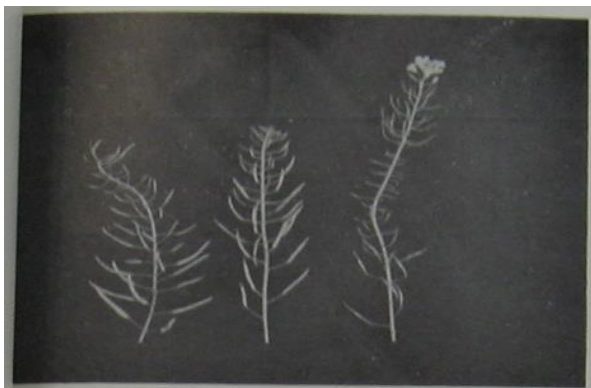
【資料1】3月29日～31日の県下各地における最低気温 (20779『干害対策』)

もかかわらず、莢^{さや}は外見異常が見られないという状態でした。

そのために農家は勿論、関係指導者等も菜種の莢の発育や麦の伸張、肥大などの遅延は低温による生育の停滞であるとばかり思い込んでいたものが、日がたつにつれ、肉眼的にも異常が明らかになり、その被害程度の激甚さが判明するに至りました【資料2】。

県がまとめた凍霜害による農作物被害状況（20779『干害対策』）によると、減収率は、小麦（50.1%）、裸麦（49.8%）、かぼちゃ（8.2%）、えんどう（4.2%）、かき（65.2%）、びわ（30.0%）、うめ（87.4%）、桑（19.7%）、茶（16.3%）、菜種（81.2%）となっています。

各種の農作物が大きな被害を受け、中でも麦と梅、菜種の被害が大きかったことが分かります。



子実の凍死（菜種）



麦の白穂

【資料2】被害状況写真（20779『干害対策』）

この災害により農家経営が極度に逼迫し、日常生活に困窮するのはもとより再生産を図るための資金にも困難を極めることが予想されました。そこで県は、凍霜害対策本部を設置するとともに、農業諸団体と提携して可能な限り緊急適切な措置を講じていきました。また、今回の天災が極めて広範多大であるということで、政府に対しても凍霜害対策要望書を提出して経済的な支援等を要請しています。

2例目は、昭和38年1月の降雪等による積雪害の事例です。この年の1月は、記録的な寒さで、県内の月平均気温は平年より3℃前後も低く、宮崎市では4℃となり1月の平均気温の最低を記録しました。月を通して冬型気圧配置が続いたため月平均風速は強く、また月間日照時間はかなり長くなりました。

一方降雪日数は、宮崎市で6日間に及び、県北山間部ではほとんど連日にわたったために、積雪の深さも記録的となり、五ヶ瀬町鞍岡、西米良村尾股^{おまた}では孤立状態に陥り、山間部を主とする積雪害を被りました。長期にわたる降雪、低温、強風のため、これまでにないような大きな被害が発生しました。被害総額及び内訳は、次の通りです。

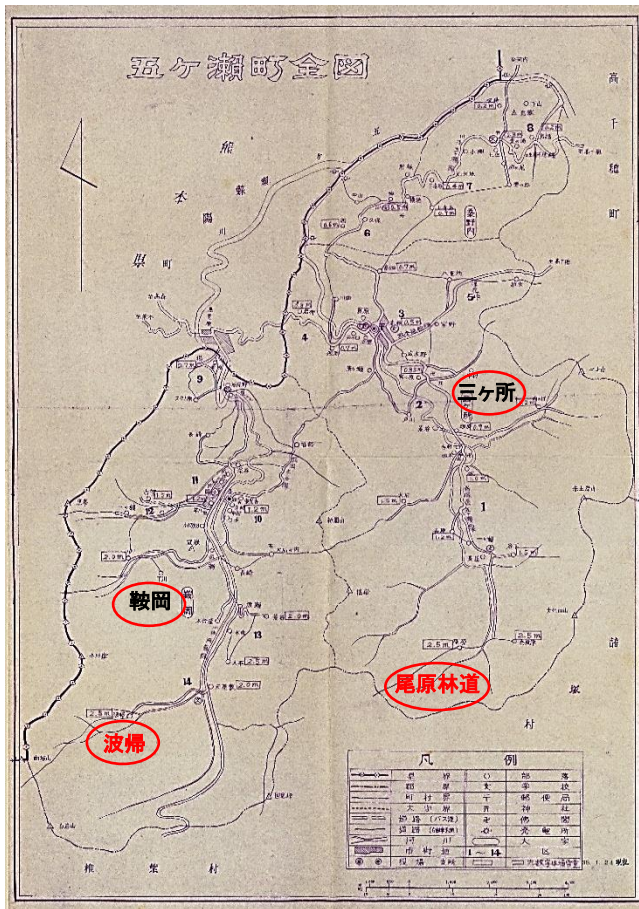
被害総額 280,832千円

- | | | | | | |
|-----------|-------|----------|---------|---------|---------|
| ①土木被害 | 5,955 | ②農業用施設被害 | 200 | ③林業施設被害 | 1,200 |
| ④教育関係施設被害 | 1,038 | ⑤建築物被害 | 669 | ⑥農作物被害 | 130,389 |
| ⑦畜産被害 | 483 | ⑧林産物被害 | 140,738 | ⑨その他被害 | 160 |

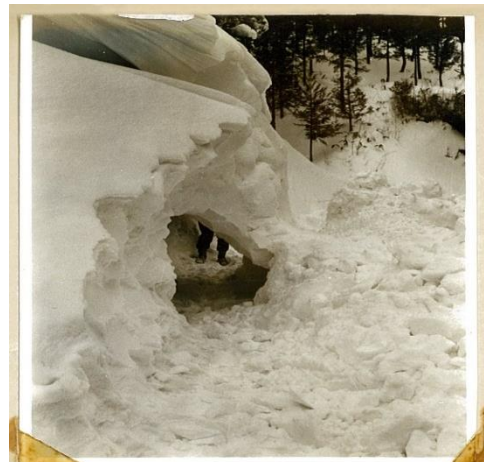
(単位千円) (20796『昭和38年積雪被害調書』)

五ヶ瀬町尾原林道においては、2.5mもの積雪が観測され、町内全体の交通が途絶し孤立状態となり、日常生活も困難を極めるという状況となりました【資料3～5】。

そのため五ヶ瀬町は、県に対し「雪害対策陳情書」を提出して緊急支援を求めています。



【資料3】積雪量分布（五ヶ瀬町全図）
(20796『昭和38年積雪被害調書』)



【資料4】尾原林道積雪のため道路を塞がれたトンネルを掘って通行
(20796『昭和38年積雪被害調書』)



【資料5】尾原林道積雪写真
(20796『昭和38年積雪被害調書』)

県は、山間地域の大雪に対して、本庁農林事務所を通じて被害状況の把握に努め、土木部長その他関係職員を現地に派遣するとともに、関係部課の連絡を密にして被害地域の援助を行いました。

- ① 1月21日 五ヶ瀬町長の依頼により航空自衛隊新田原基地に急病人用血液空輸のための航空機の派遣を要請し、同町鞍岡診療所に血液を空輸

- ② 1月29日 西臼杵支庁に雪害対策本部を設置
- ③ 1月30日 県庁に大雪対策連絡協議会を設置
- ④ 1月31日 西米良村長の要請に基づき航空自衛隊新田原基地に食糧空輸のためのヘリコプター派遣を要請。同村尾股地区(56世帯233人)に米麦20俵、調味料などを空輸
- ⑤ 2月1日 五ヶ瀬町長の要請に基づき、県経済連倉庫(宮崎市)より千切り大根200kgを県有トラック及びジープで同所に輸送

更に、今回の記録的降雪に際して、次のような対策も講じられました。

「失業対策事業」

- 失業対策事業対策地域の町村では、日雇失業保険適応地域の場合1月中不就労日には全員1日330円の失業保険金を受給できるようにした。
- 失業対策事業対策地域以外の町村では、降雪によって失業者が多発の傾向であれば、適切な措置を講ずる方針で取り組んだ。
- 就労対策として、県は山砂利採取に約50人、道路工事に25人、道路改良工事に20人、災害復旧工事等に5人等の就労対策を講じた。

「要保護者対策事業」

- 要保護者については、生活保護の申請及び早急な決定措置をするとともに、町村のたすけあい資金の貸付けをすることにした。

「道路対策事業」

- 砂利道補修(約60km)の経費として約280万円を計上して、工事に取り組んだ。

「畜産対策事業」

- 畜産被害の早急な実態確認に基づいた具体的対策の樹立に取り組んだ。また、家畜健康診断班を派遣して急患畜の応急処置、飼養管理の指導等を行った。さらに、飼料の救援や確保に努めた。

「農作物対策事業」

- 麦、菜種、蔬菜、飼料作物、茶及び果樹などが雪害寒害を被っているが、対策としては雪どけ後の肥培管理を主とした技術指導を徹底して行った。

宮崎県は、概して温暖地として考えられていますが、前述の2つの事例から、県内には地理的気象的悪条件の山間地が多くあり、冬季から春季にかけて積雪害や凍霜害の厳しい被害を受けている地区が存在することを、本センターの簿冊資料から理解することができます。

(宮崎県文書センター運営嘱託員 押川幸博)